

イネミズゾウムシの暖地における生態と防除法に関する研究

第3報 越冬状況

寺本 敏・*林 嘉孝・*永井清文 (宮崎県児湯農林振興局・*宮崎県総合農業試験場)

Satoshi TERAMOTO, Yoshitaka HAYASHI and Kiyofumi NAGAI : Studies of the Biology and Control Methods of the Rice Water Weevil, *Lissorhoptrus oryzophilus* KUSCHEL, in the Warm Region of Japan. 3. Hibernation

前報¹⁾でイネミズゾウムシの早期水稲における発生消長について報告したが、今回越冬状況について1985年と1986年に宮崎県下の主な早期水稲地帯において調査したので、結果の概要を報告する。

1. 調査方法

県下の主要発生地点(日向市、宮崎郡佐土原町、宮崎市)において早期水稲収穫後の成虫の移動及び越冬場所、量を調査した。調査は各地点の水田畦畔及び周辺山林から、畦畔、土手では雑草を含む表土を採集し、温湯に浸漬する方法により、また竹林、雑木林下では有機物残渣を含む表土を採集し、加熱したステンレスプレート上に置く方法により、出現虫数を調査した。採集面積は30cm×30cmとし、各採集場所から4点採集した。

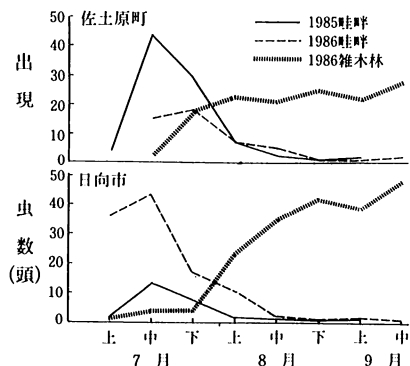
2. 結果及び考察

1) 成虫の越冬場所への移動状況 早期水稲で羽化した新成虫はしばらくの間、稲の若小茎葉を食害しながら、稲体に留まっているが、落水及び稲体の黄化等生息環境の悪化に伴い、そのほとんどが7月上旬より次第に、畦畔に移動した。

畦畔での生息密度は7月中~下旬にピークを迎え、成虫はイネ科等の雑草を食害しながら経過し、そのまま畦畔に定着する個体も見られるが、多くは他の越冬場所へさらに移動した。

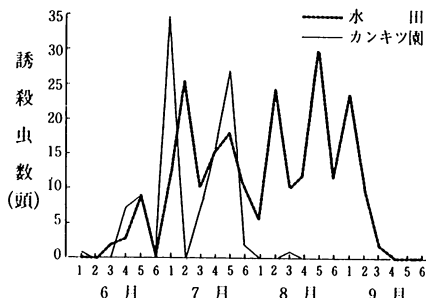
越冬場所として密度の高かった早期水稲周辺の雑木林では7月上旬からすでに低密度であるが、成虫の生息が確認され、その後次第に密度は上昇し、8月上~下旬までにはほぼ安定密度に達することから、早期水稲地帯で羽化した新成虫は8月下旬ころまでに越冬場所への定着を完了することが確認された(第1図)。

また、予察灯の誘殺は7月1半旬から急速に増加し、



第1図 成虫の越冬場所への移動状況

その後目立ったピークもなく、水田からやや離れたカンキツ園では8月3半旬、水田では9月3半旬に終息したことから、越冬場所への移動は歩行による移動と飛翔による移動があると推定された(第2図)。



第2図 予察灯への誘殺数(1986)

2) 成虫の越冬場所及び越冬密度 越冬場所における調査結果は第1表に示したが、主に早期水稲畦畔とその付近の土手等の雑草中、雑木林及び竹林(雑木林のタケ、ササ類を含む)の落葉下において成虫が検出され、特に多発水田に比較的近い雑木林及び竹林での密度が極めて高いことが確認された。

また、水田から約500m離れた場所においても低密度であるが、成虫が確認され、水田からかなり離れた場所まで飛翔分散することが示唆された。

第1表 成虫の越冬場所及び越冬密度

試料 採集地	採集場所 (水田からの距離)	出現虫数(1㎡当たり平均)	
		1985年 (1985.12.23)*	1986年 (1987.1.9)*
佐土原町	早期水稲畦畔	33	11
	早期水稲刈株	0	0
	早期水稲隣接土手(5m)	9	8
	雑木林(10m)	392	214
	"(30m)	56	81
	"(100m)	37	31
	"(200m)	11	28
宮崎市	"(500m)	3	28
	竹林(300m)	-	76
	"(500m)	-	9
	早期水稲畦畔	11	8
	早期水稲刈株	0	0
宮崎市	早期水稲隣接土手(5m)	6	147
	竹林(10m)	-	172
	"(30m)	363	353
	"(100m)	19	-

注) 1. 数値は1地点4ヵ所調査の平均値
2. (*)は調査月日、ただし、宮崎市の1985年は1986年1月29日、1986年は1987年1月23日調査

引用文献

1) 寺本 敏・永井 清文：九州農業研究，48，160，1986。